

小春日や

小春日や鎌倉辺りの粹人はひねもす歌を詠みにけるかも

弁慶

めぐりあう千首に華やぎ言祝ぎの桃李歌壇に初めの一步

くりおね

巡りあひてしばし憩ひぬ遅咲きの銀木犀の香り忘れず

ぎを

遅咲きは花のみならず人もまた歌に恋にと飛ぶ凍蝶

深海鮫鯨

鎌倉の右大臣なる歌詠みのひそみに倣う腰越の人

弁慶

小動(こゆるぎ)の縁の寺の門前にコーヒーショップ名は“義経”と

蘇生

薄絹のヴェールをまとい険しくも人目を忍び獣道行く

くりおね

粟・稗の耕作教へし義経はハンガンカムイと蝦夷に祀らる

真奈

義経記にその名を残せし若武者の掘藤次の屋敷跡かな

弁慶

恃みての挫折をこえてのちゃんの名前ふたび神無き月に

蘇生

2時間も同じ動作を繰り返すマラソンランナー偉大と言うべし

弁慶

マラソンも歌も三多に勤むべし多読多作と多思量の汗

深海鮫鯨

朝なसान受信トレイのメールには不埒なもの余りに多き

蘇生

自動的に迷惑メールに送られて受信トレイはいつも空っぱ

くりおね

近況を告げよと娘へメールすれば「元気っす」のみ五文字の返事 雛菊

今日もまた天使ら愛の福音を携帯電話のメールに送る

ぎを

福音を聴くごとくをり菩提寺の銀杏の降らす葉を浴びながら

たまこ

銀杏こそ金色ならむ冬の日にふところ寒し愛と金とに

深海鮫鯨

石踏の黄は意志の色なり俗を捨て俳諧きわむる君にふさわし(ある俳諧師へ) 茉莉花

石踏の黄とセージの青が寄りそふてしばし華やぐ小六月かな 雛菊

クロノスの髭艶やかな小春風ロゼのワインをお注ぎませう 真奈

夢に酔ひ朝に醒めて凧のごとシートに残る波の起き伏し 深海鮫鯨

荒波をいくつ越えたるアメージング調べゆたかにアドベントはも れん

霜月の干し竿に未だゐる蛙お経を唱えてゐるとき面 たまこ

霜月の夕べの風に防犯のポランテア打つ拍子木の音 蘇生

夢破る拍子木響く寒空に今宵も巡る君を思へり 深海鮫鯨

緊張に単純なミス繰り返す拍子木の鳴りすでに幕開き くりおね

拍子木の鳴りて出でたる蔵之助観客席より遅かりし声 弁慶

この夏の比叡の夜の薪歌舞伎その幽玄の余情は今も 蘇生

弁慶が勧進帳に思うべし 安宅になさけ人に花あり 深海鮫鯨

雨晴海岸はるか立山の義経主従の道は遠きに 真奈

勧進帳聞きて涕す関守は安宅の関の富樫左衛門 弁慶

今日はどうぞよろしくとこと雪が降ります僕の花道 山猫

木枯らしの夜のネットに見つけたる雨晴海岸 思ひみるかな たまこ

人影の見えぬ海辺に幾重にも砂塵を防ぐ柵や冬ざれ 蘇生

落ち葉して七時雨山に冬来る雪の兆しの雲天に満つ 弁慶

どんぐりの落ちて転がる吹き溜まり肩寄せ合いて冬を迎える くりおね

餓えあればどんぐり拾う栗鼠となり月にも捧げんそのどんぐりを 深海鮫鯨

どんぐりのいさかひ山猫名さばき賢治の宇宙は大悲の心

ぎを

どんぐりの背比べとはこの事がベンチ暖むわれら三人

弁慶

堤防に冬兆しては有無もなく三季の釣りを省みる日々

蘇生

酸敗の殘杯惜しむ我なれば詩酒を祭りて冬こそ吟ぜむ

深海鮫鯨

無二の秀句(すく) 逆境にこそ詠まれけり吟ぜよ出でよ冬ざるる野に

蘇生

新しくよみがえる目にうつりゆく景色を抱け詩は満ちている

くりおね

逆境は金では買えぬ詩材なり景色に払う金も無き身に

深海鮫鯨

冬靄に頂かすむ岩手山裸木映す雫石川

弁慶

デパートの生鮮域をめくりても師走を詠う景はあるらん

蘇生

経めぐりて実らぬ恋の尽きし余も新巻き鮭の眼はなほ閉じず

深海鮫鯨

来る来ない恋の季節は近づきぬ今年はいづこに「クリスマス・イブ」

ぎを

クリスマスイルミネーションを飾る家近所に増えてサンタ来るらし

くりおね

君がためイブに捧げむ詩のために禿筆ひねりサンザ苦勞す

深海鮫鯨

新宿のアルタの前でとメールあり電飾光る木々の下かな

弁慶

楽しげに友とツリーを老婦人ぼつんぼつんと老いたる男

蘇生

男より婦人と犬の多き街われは連れ行く夕べの孤影

深海鮫鯨

犬連れて散歩する人多き街少子高齢矢のごとくかな

弁慶

飼い主に品性も似る不思議さよチエホフの書きし貴婦人の犬

茉莉花

美しき花の隣に住む人の飼いたる犬とわれは戯むる

深海鮫鯨

自分では犬と思わぬ犬がいてそのこと言いし人を見上げり

蘇生

美しき薔薇に棘あり人の世も美は惜しみなく奪ふものかな

ぎを

魂はこの身を離れ遊びゆく言葉の舳先に風を受けつつ

くりおね

言の葉を木の葉に書いてさしあげむ村の鎮守におはす狐に

深海鮫鯨

草紅葉中に緑のよもぎあり草それぞれと思いいけるかな

弁慶

デパ地下で季語を思いて折々に巡りてみれど旬は失せたり

蘇生

なんとまあ気の毒な名よへクソカヅラ鼈甲色の実ドアに飾れば

雛菊

饒舌な秋よと思う椎も楷も蔦も楓もそれぞれの紅

たまこ

色づきてやがて錆びゆく木々の葉はすでに春への小芽を抱けり

蘇生

千山の紅葉を一夜に吹き飛ばす夜来風雨の声ぞ激しく

弁慶

脱ぎ捨てる前の桜のほの明き艶やかにして女なるべし

くりおね

極月の二日が明けて残り日と過ぎにし日々をしかと思ほゆ

蘇生

起こるべくして起こりしと明らむも「想定外」はこの悲しみぞ

ぎを

逆風の吹き始めたるわれらシニアこころゆたかに日々過ごさうよ

茉莉花

同じ火が君の胸にも炎えてをり残花少しく色の息づく

真奈

消え失せし胸の炎もまた燃えむ面影橋に一人立つとき

弁慶

やまとなる和しては歌う心にてこたふるうたを重ねゆきたし

蘇生

人として言葉もちたる天からの贈り物こそときを制する

くりおね

ときどきに詩にこころざし歌にこゑ称へ続けむうましやまとを

深海鮫鯨

言の葉の心入れたる詠人のふくらかなりし歌ぞうれしき

蘇生

朝霜に楓あかあか染まりたり忍ぶ心もかぎりあるらむ

くりおね

足柄や嶺のもみじ葉散りはてて山椿咲く関の跡かな

弁慶

冬空に朱き花つけ忘れ鉢今朝の寒さに言葉かけやり

真奈

真夜中の紅き林檎は凜としてそのけなげさに涙こぼるる

茉莉花

三年余貝につぐみてけなげなる介護ベッドに臥したる母は

蘇生

そばにいるただそれだけで笑顔なり子を生きがいとする母ゆえに

くりおね

母逝きて三年となりぬこの秋も一人登りし無縁坂かな

弁慶

この冬は帰ると言へば楽しみと母らしからぬ言葉さびしくて

ぎを

気がかりな自分の病気はさておいて息子の心配ばかりしている

くりおね

電話にて彼をいたはる声優し母の恋は小春日のやう

雛菊

カルメンも聖母マリアもこなさねばアルトはダメと言われ悩んだ

真奈

往年のファーストテナーも老いいたり似非バリトンの今はカラオケ

蘇生

月曜の夫が髭を剃る音を聞きつつシーザーサラダをつくる

たまこ

火曜にも土曜を思ふ日々でありわれは剃りゆく霜降る鬚を

深海鮫鯨

疎らなるごま塩ほどの髭をなで水曜日には剃ることにした

蘇生

やうやくに生え揃ひたる髭に当つる父のシェーバーこそばゆからむ

かわせみ

不縁てふ猫の帰りにミルク呑む父なる母なる懐寝入る

海月

亡き父の終への日々を回想す生きることのみ日々生きつべし

蘇生

髭剃りて鏡の中に頼りなき人の顔あり亡き父を思ふ

ぎを

鏡こそあの世に通ずる窓ならむアリスは出会ふ昔のわたし

深海鮫鯨

ほんたうのわたしは何処にゐるならむ昔のわたしも更にあらなく

れん

ことごとく記憶をせしと思いしが参歩進みてすべて忘却

弁慶

弥陀の掌に生かされていると幼き日教えし祖母の甦りくる

真奈

無礙光の朝のわが苑かぞへれば千首の花の常(とは)に咲くなり

丹仙

桃李和歌連作百首歌集

第六九〇一首より七〇〇〇首迄

平成一七年一月二二日より平成一七年二月七日